

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 24 号, 2021 年, 抜刷 (pp.107-112)

<書評>

嘉幡茂 著

『図説 マヤ文明』

東京、河出書房新社、2020 年、131 頁、2000 円+税

鈴木真太郎 (岡山大学 文明動態学研究所)

Kabata, Shigeru, *Las Civilizaciones del Área Maya en Mesoamérica*

Shintaro Suzuki (Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』24, 2021, pp.107-112

<書評>

嘉幡茂著

『図説 マヤ文明』

東京、河出書房新社、2020 年

131 頁、2000 円+税

鈴木真太郎

(岡山大学文明動態学研究所)

1. はじめに

実際、評者にとって書評は苦手な作業である。自らの調査資料を先行研究の枠組みの中で解釈し、新たな知見を提示する。こういった普遍かつ絶対の目的、基準が存在する論文とは異なり、本は想定される読み手、伝えたい内容によってとにかく千差万別である。「こういう本が良い本」という絶対的な価値観が存在しない以上、どう書かを評するべきなのか。よくわからないのである。そこで評者は考えた。自動車や電子製品の評価でよく言われる「その製品が目指すところが適切に実現されているか」、この視点から書を評してみたらどうだろう。千差万別である書を評する時、書の目的をまず把握し、その目的が達成されているかどうか。これを基準に評すれば、少なくとも外的な書評にはならないだろう。

では、本書『図説マヤ文明』が目指すべきところはどこなのか、これを知るためにまず出版元である河出書房新社の Web サイトを訪れた。同社によると、『ふくろうの本』は「豊富な写真、イラスト、図版とともに、世界史、日本史、文化、美術、人物、自然……あらゆるテーマがコンパクトな一冊に。森羅万象を“図”で読み解くシリーズ」とある。なるほど、専門家を対象にした学術書というよりは、広範な読者を想定した一般書という趣である。多くの人々が、自ら関心のある多様なテーマについて、図から、コンパクトに、勉強できる本ということなのだろう。実に面白い建付けである。さて、それでは、この『ふくろうの本』の目的に従い、本書『図説マヤ文明』は、そのタイトル通り、マヤ文明に興味をもつ一般の読者が、図から、マヤ文明をコンパクトに学ぶことができる本なのだろうか。

2. 著者について

本書の著者である嘉幡茂氏は、スペイン語、英語で書かれた多くの論文で知られ、また近年では日本語でも数多くの著作を発表されている [e.g. 嘉幡 2019]、まさに新進気鋭の考古学者である。一方で、氏は主にテオティワカンなどメキシコ中央高原で研究を行なってこられ、マヤ文明圏を専門にされているわけではない。『図説マ

ヤ文明』という本の著者としてふさわしいのだろうか。一抹の不安を覚えたのもまた事実である。しかし、「はじめに」を読んでその不安は解消された。「メソアメリカという大きな枠組みから見たマヤ文明」という本書のテーマの提示である。冒頭から丁寧に本書の立ち位置が明確にされ、メキシコ中央高原で長い発掘調査経験と研究業績のある嘉幡氏の描くマヤ文明像に期待が膨らむ。

3. 章立てについて

本書は全131ページ、6章で構成されている。第1章ではメソアメリカ文明の概要と、アメリカ大陸に最初の人類が入植した過程から、パレオインディアン期（紀元前20000～紀元前7000年頃）と古期（紀元前7000年頃～紀元前2000年頃）の物質文化や人々の生活等が紹介され、続く第2章、第3章、第4章ではマヤ文明圏でよく使われる時代区分に従って、先古典期、古典期、後古典期、それぞれの概略と各時期を代表する論点が紹介されていく。第2章でオルメカ文化との交流を軸に「古代都市の誕生」が議論され、第3章ではテオティワカンとペテン地方の接触を主なテーマに定め、神聖なる「王たちの台頭」が、そして第4章ではトゥーラとチチェン・イツァの関係を柱に、各地で認められる羽毛ある蛇のモチーフなど、メソアメリカとマヤの間で「つながる世界」が語られるのである。第5章では特に時代を限定せず「マヤの戦争」が解説され、最後の第6章、著者自身の経験に基づくメキシコ中央高原の発掘体験記「ピラミッドを掘る」をもって本書は結ばれる。その他、文化的肉体変工（「マヤ人の美学」）などのテーマをピンポイントで紹介するトピックが5篇、さらにマヤ文明の著名な遺跡（と、トゥーラ・グランデ）を紹介する遺跡紹介コラムが11篇用意されており、幅広く、充実した構成である。「メソアメリカの中のマヤ文明」という視点も大いに活かされていると言えるだろう。

4. 図版について

図版の多さ、わかりやすさ、そして美しさは『ふくろうの本』の目的から『図説マヤ文明』を評する上で、極めて重要な要素である。そして、この要素から言えば、本書は完全に「素晴らしい」の一言に尽きる。冒頭の年表はとてもわかりやすく各都市遺跡の栄枯盛衰を描き出し、メソアメリカ全域をカバーしながら、天然資源の分布状況や河川の位置関係とともに、主要な遺跡の配置を紹介する「メソアメリカ遺跡地図」もとても良い出来（唯一、山地等、標高差の概念が取り入れられていないのが残念ではあるが）である。本文全体を通して、美しいカラー図版が多く、また本書のために作成されたと思われる画期的な図版も豊富である。特に112ページからのマヤ文明圏、メソアメリカ全体、そして世界のピラミッドを比較する図面などは、ピラミッドに強いこだわりを持つ著者ならではの、と言えるだろう。また、通常の書籍にみられるような簡潔なキャプションだけをつけて図版を出しっ放しにするのではなく、大量の説明文でそれぞれの図版を丁寧に解説しているのも大いに好感が持てる。森羅万象を“図”で読み解く『ふくろうの本』、まさに面目躍如である。

5. 『図説マヤ文明』を通して、図からマヤ文明をコンパクトに学ぶことができるのか

さて、肝心の「目的は適切に達成されているのか」に沿った本書の評価である。評者としては、残念ながら部分的な達成、と言わざるを得ないように思う。コンパクトというよりは、メキシコ視点でトリミングされた不完全なマヤ文明像という印象である。丁寧に、真面目に作られたとても良い本なのは間違いない。しかし、ユカタ

ン半島で学び、ホンジュラス/コパンで長く調査をさせていただき、そして近年までグアテマラの大学に勤務した生粋のマヤ馬鹿である評者としては、『図説マヤ文明』というタイトルを冠する新刊として本書を見ると、やはりなんとも寂しいのである。おそらくは紙幅の都合というのが一番大きい原因なのだろう。しかし、いかんせん、物足りない。

まず、メソアメリカ全体から見たマヤ文明という視点は確かにとても重要で、マヤ文明の正しい理解には必須となる論理的枠組みである。しかし、本書ではこの「メソアメリカから見た」という枠組みに固執するあまり、あちこちで説明が急にメキシコ中央高原やメキシコ湾岸地域、オアハカなどに流れてしまい、時にはメソアメリカの知見とマヤの知見が、時系列を無視して、混在する。その結果として肝心のマヤ文明像はぼやけ、あまりに簡略化され、マヤ文明に関する大切な認識、説明が大いに不足している感が否めない。メソアメリカが広大で多様であるのと同様、マヤ文明圏そのものもまた広大で多様なのである。例えば、先古典期後期に石碑に王の事績を刻む文字が発達したという言及がある（37 ページから 38 ページ）。しかし、これは一概にマヤ文明圏全体に敷衍することはできない特徴である。この時期に王と石碑、文字が登場するのはやはり主に南部マヤであり [Kaplan and Love 2011]、これをペテン地方からユカタン半島北部までを含んだ、さもマヤ圏全体の特徴であるかのようにするのは適切ではない。マヤ文明圏内での地域性に関する議論、少なくとも但し書き的な説明は必須であったように思う。

またグアテマラに、数年とは言え、暮らした身からすると、(図にはドットが打たれ、年表にはバーがあるが) カミナルフユ遺跡に一切の言及がないのはあまりに辛い。マヤ文明随一の古都として知られ、その編年は南部マヤの広域で大きな議論を巻き起こし [Inomata et al. 2014, 2019; Love 2018, 2019]、ペテン地方に先んじる強力な王権の存在も示唆されている [e.g. Kaplan 1996]。それと、頻繁にポ波尔・ヴフ (本書では単純に「神話集」という説明がなされているが、その説明も適切かどうか疑問である [cf. 大越 2018]) が言及される一方で、まさにそのポ波尔・ヴフを伝えたキチエの人々が築いたクマルカフ (またはウタトラン) 遺跡や、その他、カクチケル王国の都であったイシムチェ遺跡、マムの人々が拠ったサクレウ遺跡など、後古典期の高地マヤ諸王国の興亡 [cf. Ivic de Monterroso et al. 2012] については全く説明がない。さらに言えば、著者渾身のテオティワカンとマヤというテーマについても消化不良感は否めない。長年ペテン地方と同等に重要視されてきたカミナルフユとテオティワカンの関係 [cf. Valdés & Wright 2004, see also Arroyo 2020; Arroyo et al. 2020] にはほとんど触れられず、同様に同テーマにおいて極めて重要な意味を持つはずのグアテマラ南海岸地方への言及も一言のみである。「マヤとテオティワカン」という小見出しを設け、6 ページもの文量を割いたわりに、あたかもペテン地方にしかテオティワカンとの交流が存在しなかったかのような印象さえ受ける。南海岸にはペテン地方に先行するテオティワカン交易の可能性が示唆されているバルベルタ遺跡や、完形の劇場型香炉が出土しているモンタナ遺跡があり [cf. Braswell 2003]、これらには是非とも触れてほしかった。

また、評者はマヤ文明圏で古人骨の研究を行ってきたため、トピック 2 「マヤ人の美学」 (60 ページから 61 ページ) は特に気になった。一例を挙げれば、図 2①で発掘調査から得られた古人骨として紹介されている頭蓋骨は明らかに先古典期特有のオルメコイデ変種と呼ばれる変形を伴うもので [Tiesler 2012:62]、図 2②の古典期に多く見られる傾斜型の頭蓋変形と形が違うのは当然である。時代背景も違えば、変形に使われている技法も、理想とした形態も、全く違うのである。この二つを比較して、発掘調査で得られる古人骨と図像で見られる頭の形に違いがある、とする論点には正直意味があるとは思えない。古典期の図像で見られる後ろに伸びた頭の形に酷似する傾斜型の変形頭蓋骨は古典期マヤ文明圏各地で大量の出土例があり、図像と実際の変形は一致するケースが多い。オルメコイデ変種もサン・バルトロ遺跡の壁画に見られるトウモロコシの神の図像やオルメカ

の石偶の頭の形と一致することが知られている〔Tiesler 2010〕。また象嵌タイプの歯牙装飾を簡単に特権階級のシンボルとしているのにも抵抗がある。確かにコパン遺跡では象嵌タイプと副葬品の寡多や墓の規模に相関関係が認められているが〔Suzuki 2015〕、歯牙装飾研究の古典であるハビエル・ロメロ・モリナ（Javier Romero Molina）〔Romero Molina 1958:227〕の研究では、相関関係はないと報告されている。さらに研削タイプの歯牙装飾について、歯牙変工が広く実践されていなかった一般人と異なる発音、というような記述があるが、少なくともマヤ文明圏では、特に研削タイプの歯牙装飾が支配者層に限定されるということはない。古典期においては古人骨の約60%になんらかの歯牙装飾が認められており〔Tiesler 2011:198〕、植民地期初期のランダの記述とも一致しない〔ソリタ・ランダ 1982:360〕。

6. さいごに

さて、ここまで「その製品が目指すところが適切に実現されているか」という視点に従って、本書『図説マヤ文明』はその名の通り、マヤ文明に興味ある一般の読者がマヤ文明をコンパクトに学ぶことができる本なのだろうか、を評してきた。全ての著作と同様、本書にもとても良い点と、（評者なりに）気になる点があったように思う。それでは、その両方を踏まえて、例えば学生や、その他多くの人に、自信を持って本書を推薦することはできるだろうか。結論から言って、できる。間違いなく定価以上の価値がある良書である。マヤ文明と合わせてメソアメリカ各地の丁寧な紹介が読めることはとてもありがたく、豊富な図版も大変魅力的である。ただやはりマヤ文明の全くの初学者というよりは、マヤ文明に特化した他の概略書を読んで既に大枠を把握しており、その上でさらに視点を広げたいと考えている読者諸賢にこそお勧めしたい一冊と言えるだろう。

【謝辞】

本書評の機会を与えてくださった『古代アメリカ』編集委員の皆様、そして御本を送ってくださった嘉幡茂氏に、この場を借りて深く感謝いたします。同様に匿名の査読者2名にも感謝いたします。

参考文献

Arroyo, Bárbara,

- 2020 Teotihuacan, Kaminaljuyu, and the Maya Highlands: New Perspectives on an Old Question. In *Teotihuacan. The World Beyond the City*, edited by K.G. Hirth, D. M. Carballo, and B. Arroyo, pp.435-461, Dumbarton Oaks. Research Library and Collection, Washington, D.C.

Arroyo, Bárbara, Takeshi Inomata, Gloria Ajú, Javier Estrada, Hiroo Nasu, and Kazuo Aoyama

- 2020 Refining Kaminaljuyu Chronology: New Radiocarbon Dates, Bayesian Analysis, and Ceramics Studies. *Latin American Antiquity* 31(3):477-497.

Braswell, Geoffrey (ed.)

- 2003 *Teotihuacan and the Maya: Reinterpreting Early Classic Interaction*. University of Texas Press, Austin.

Inomata, Takeshi, Raúl Ortiz, Bárbara Arroyo, and Eugenia J. Robinson

- 2014 Chronological Revision of Preclassic Kaminaljuyú, Guatemala: Implications for Social Process in the Southern Maya Area. *Latin American Antiquity* 25:377-408.

Inomata, Takeshi, Bárbara Arroyo, and Eugenia J. Robinson

- 2019 Chronology Building in Southern Mesoamerica: Comment on Love. *Latin American Antiquity* 30:224-226.

Ivic de Monterroso, Matilde, Tomás Barrientos, Marion Popenoe de Hatch and Carlos Alvarado.

- 2012 Arqueología y etnohistoria de la cuenta del lago de Atitlán (600 a.C. a 1840 d.C.). *Revista de la Universidad del Valle de Guatemala* 24:7-34.

嘉幡茂

- 2019 『テオティワカン—「神々の都」の誕生と衰退—（環太平洋文明叢書）』 雄山閣。

Kaplan, Jonathan, and Michael Love (edit.)

- 2011 *The Southern Maya in the Late Preclassic. The Rise and the Fall of an Early Mesoamerican Civilization*. University Press of Colorado, Boulder.

Kaplan, Jonathan

- 1996 El Monumento 65 de Kaminaljuyu y su ilustración de ritos dinásticos de gobierno del Preclásico Tardío. En *IX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 1995*, editado por J.P. Laporte y H. Escobedo, pp.404-412. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Ciudad de Guatemala.

Love, Michael

- 2018 Kaminaljuyu Chronology and Ceramic Analysis: An Alternative View. *Latin American Antiquity* 29:260-278.
2019 Quality Control and Chronology: Response to Inomata and Colleagues. *Latin American Antiquity* 30:227-228.

大越翼

- 2018 「『ポ波尔・ウーフ』と先住民文書の世界：植民地時代を生き抜く叢智」『グアテマラを知るための67章第2版』（桜井三枝子編） pp.117-120、明石書店。

Romero Molina, Javier

- 1958 *Mutilaciones Dentarias Prehispánicas de México y América en General*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, Ciudad de México.

Suzuki, Shintaro

- 2015 Población y organización socio-política en el Valle de Copán, Honduras, durante el periodo clásico, y sus implicaciones en la dinámica de fundación y colapso del Estado Copaneco. Tesis doctoral, Universidad Nacional Autónoma de México, Ciudad de México.

Tiesler, Vera

- 2010 “Olmec” Head Shapes among the Preclassic Period Maya and Cultural Meanings. *Latin American Antiquity* 21(3):290-311.
2011 Decoraciones dentales. In *Manual de Antropología Dental*, editado por Andrea Cucina, pp.183-206. Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida.
2012 *Transformación en Maya. El Modelaje Cefálico entre los Mayas Prehispánicos y Coloniales*. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, Ciudad de México.

Valdés, Juan Antonio, and Lori E. Wright

- 2004 The Early Classic and its Antecedents at Kaminaljuyu: A Complex Society with Complex Problems. In *Understanding Early Classic Copan*, edited by E.E. Bell, M.A. Canuto, and R.J. Sharer, pp.337-356. University of Pennsylvania, Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.

ソリタ, アロンソ・デ、ディエゴ・デ・ランダ (小池佑二・林屋永吉訳)

1982 『ヌエバ・エスパニャ報告書・ユカタン事物記』 岩波書店。

原稿受領日 2021 年 8 月 27 日

原稿採択決定日 2021 年 9 月 14 日